

企画展「近代彦根の歩みと彦根高等商業学校の誕生」

2015年6月15日（月）～12月18日（金）

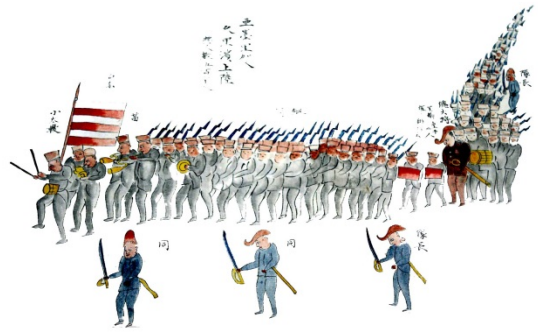
展示解説



開国から維新へ

上田道三筆 彦根城原型図

上田道三（1908－1984）は彦根生まれで、生涯郷土の風景・町並みを描いた郷土画家として著名であるが、むしろその真骨頂は、彦根城の古地図などの史料を研究して「彦根城郭旧観全景図」などを描いた彦根城郭図の第一人者である。この絵もその成果の一つであり、おそらく天保期の城郭絵図史料をもとに彦根城郭の全景を復元したものであり、往時の風景が彷彿とよみがえる。（滋賀大学経済経営研究所蔵）



井伊直弼公長野義言和歌短冊軸

井伊直弼公と国学者長野義言（長野主膳）は、天保13年（1842）11月20日に彦根の埋木舎で会い、その後、国学や和歌の交流があったとされる。2人のその後の人生は波乱に満ちており、小説に映画にドラマに取り上げられることも多い。2人とも彦根の幕末を生きた武士であった。無根水（むねみ）は直弼公の和歌の号のひとつ。（個人蔵）

米艦渡来之図

この絵図は、嘉永6年（1853）6月3日にペリーが浦賀沖に投錨し、同9日に米大統領の親書を幕府に手渡した時の模様を詳細に描いたものである。従来この種の絵図には砂浜や海上での諸藩の警護の布陣や国書受取所等の全景が俯瞰的に描かれているものが多いが、今回展示した絵図には上陸するアメリカ兵の人数、軍楽隊の行進風景や楽器の形状、兵士の服装や米軍艦の特徴等がクローズアップされて事細かく描かれている。おそらくこの時警護に参加した彦根藩が場面ごとに特徴を図示して報告させたものと思われ、当時の実情を知るうえで貴重な資料といえよう。（滋賀大学経済経営研究所蔵）

富岡製糸場から彦根製糸場へ

菰塚直次郎・みねの墓

菰塚直次郎（1823－1898）は、富岡製糸場の建設や賄係、工場募集などに携わった人物。その妻みねは彦根藩士の子であった縁から多くの士族子女を富岡製糸場に誘った。そうした多くの子女たちとともに今は富岡市の龍光寺に眠っている。

遠城繁子像

彦根藩士遠城謙道の妻繁子。富岡製糸場に赴き工女取締役等として活躍した。

『遠城謙道伝 附繁子歴』

彦根藩士遠城謙道は井伊直弼の死後、禅門に入り主君の菩提を弔うために生涯を奉げる。その伝記（明治35年刊）には、妻繁子の略伝が記されており、繁子が生計を立てるため、富岡製糸場の工女募集に応じて富岡に赴き工女取締り等の任に当たった経緯が記されている。（滋賀大学附属図書館蔵）

富岡製糸場

明治政府の殖産興業政策によって明治5年（1872）群馬県富岡（現在の富岡市）に設立された器械製糸のための官営模範工場。設備や生産技術はフランスから導入され、300人繰りの繰糸器を備え、当時世界最大規模で全国から士族の子女らが工女として集まった。平成26年（2014）世界遺産に登録。

高谷光雄の日記『自弘化甲申 至明治乙巳 家庭年表』

高谷光雄は旧鯖江藩士の子に生まれ、維新後は滋賀県勸業課長として県営彦根製糸場の建設に尽力し初代場長となる。高谷が残した『家庭年表』によれば、明治10年（1877）8月同僚県吏森十等属を伴って関東に赴き、当時器械製糸業の権威・速水堅曹を訪ね、共に富岡製糸工場ほか上野及び信州の生糸産地を視察している。速水は、当時富岡製糸場長であったが、富岡のフランス式とは異なるイタリア式製糸器械の推奨者であった。また明治13年（1880）、彦根城で製糸場の利益に供するため繭糸共進会が開催されていたこともわかる。（滋賀大学経済経営研究所デジタルアーカイブ）

工女図（『士族授産事類願伺』明治9年）

この工女図は、明治9年（1876）4月13日に、武節貫治（井伊直弼の甥）等彦根士族が独自の製糸場建設を企図して県令籠手田安定に提出した「製糸器械所設立之儀ニ付嘆願書」に添付されていたものである。これを見ると、製糸器械は繭の煮繰を1人で行い2つの集緒器から上った糸を1本に撚り合わせる「トモヨリ式」でさらに小枠に巻き取るという富岡製糸場に導入されたフランス様式であるが、木製でより簡易に工夫されていることが分かる。（滋賀県県政資料室蔵）

製糸場操業ノ図（『滋賀県管内犬上郡誌』明治14年）

彦根製糸場は、明治11年（1878）6月、彦根士族の独自経営ではなく県営模範工場として三条取り2人掛けの器械48釜にて創業し、富岡製糸場帰りの士族子女約100名が工女として働いた。これは『犬上郡誌』（明治14年刊）に掲載された彦根製糸場操業の図であるが、器械は富岡製糸場のフランス式ではなく、煮繰分業で1本に集緒した糸を絡ませて撚りかけして大枠に巻き取るイタリア式で、イタリア式を推奨していた速水堅曹の指導によるものであった。（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）

東野善一郎著『懐旧夜談』近江新報社（明治39年）

明治39年（1906）7月、近江新報社の記者東野善一郎は、聞き書きと蒐集資料をもとに高谷光雄の伝記を『懐旧夜談』としてまとめた。その「巻ノ二」、「在官時代之部」には「彦根製糸場創設の事」が収められ、県営彦根製糸場開業に至る経緯や開業式の模様が詳しく記されている。（滋賀大学経済経

営研究所蔵)

『滋賀県勸業年報 第一回』(明治 12 年)

滋賀県では明治 12 年から 19 年まで『滋賀県勸業年報』を毎年発行し、県内産業の実態を報告している。明治 12 年(1879)の第 1 回報告をみると、彦根製糸場の経営内容が「購繭」「製糸」「出納」「工女」「目途」にわたって詳細に明らかにされている。(滋賀大学経済経営研究所蔵)

近代彦根町の発展

「湖上蒸気船金亀丸之図」

明治 2 年(1869)3 月 3 日、大聖寺藩の手によって建造された蒸気船「一番丸」が大津港から琵琶湖に就航した。これを嚆矢とし彦根藩でも明治 4 年、松原の造船所で建造された蒸気船「金亀丸」が、米原―松原―大津間を航行した。この錦絵には、「金亀」の旗をたなびかせ、蒸気の黒鉛を吐きながら琵琶湖上を疾走する(時速 4 里=15.7 キロ)姿が描かれている。(個人蔵)

北澤松次郎商店・引札(明治 37 年)

彦根橋向町で醤油醸造並に米穀肥料等を取扱う北澤松次郎商店の引札(広告ビラ)である。各種郵便料金と取扱法が一般郵便物だけでなく小包や為替についても表示されている。明治 5 年(1872)に彦根で郵便制度が開始され、北澤商店があった橋向町には郵便函場と切手売下所が置かれていた。小包や為替が郵便局で取扱われるのは明治 23~26 年頃からである。(滋賀大学経済経営研究所蔵)

近江鉄道株式会社・第 1 回営業報告書(写)

近江鉄道株式会社は、西村捨三や大東義徹ら彦根士族が立案企画し、中井源三郎・庄野玄三・小林吟右衛門・阿部市郎兵衛といった近江商人が協力する形で明治 29 年に創業し、初代社長には大東義徹が就いた。これはその記念すべき第 1 回の営業報告書である。(個人蔵)

御旅館彦根鳥羽屋・引札(明治 31 年)

彦根に蒸気船が就航したのが明治 4 年(1871)、郵便事務取扱所が設置されたのが同 5 年(1872)、東海道線が開通したのが明治 22 年(1889)、近江鉄道が彦根―愛知川間に開設したのが明治 31 年(1898)であった。彦根の中心街・河原町に位置する旅館鳥羽屋には、宿泊客の利便を図って鉄道と太湖汽船の時刻表、小包郵便料金表と取扱時刻などが掲げられた。明治 5 年(1872)からの新暦に従った均質な時間運行(太陽暦、定時法)が社会に行き渡っていく過程が表れている。(とばや旅館蔵)

上田炭店・引札

東海道線は明治 22 年(1889)7 月 1 日、馬場(現在の膳所)―米原間が開通して全線が繋がった。米原―彦根間は、いまだ埋め立てられていない松原内湖のほとりを通り琵琶湖を望みながら蒸気機関車が疾走した。開設当時は 1 日に上り 5 本、下り 4 本であった。湖東の山々の村では炭焼きが盛んで、薪炭を彦根の町場に搬入しては日用品と交換していた。そうした薪炭材の一部は鉄道や船便を介してさらに遠方へ運ばれていった。(滋賀大学経済経営研究所蔵)

種油並に石油取扱商・細居松次郎商店の引札（明治 39 年）

明治 35 年（1902）、日本はイギリスと日英同盟を結び、ロシアと対抗した。明治 38 年にはより攻守同盟としての色彩を強くする改定がなされ、日本は日露戦争に際しても大いに助けられた。この引札は、日露戦後の勝利に沸く明治 39 年のものであり、日英同盟改定を祝ったものである。さらに新旧暦の対照表が付され旧暦と約 1 ヶ月のずれがある新暦での生活の利便に供されている。また「神武天皇即位紀元二千五百六十六年」と記され、紀元節・天長節といった祝祭日も示されて大日本帝国としての暦の特徴が表れている。（滋賀大学経済経営研究所蔵）

彦根融通会社関係史料

彦根では、明治 3 年（1870）4 月に彦根融通会社が設置され、領内の豪商の身元金を集めて藩債処理のための彦根藩への貸付や旧藩札と新札の交換、預金と貸出業務を行った。初代社長には、彦根藩の下で藩債処理に当たっていた御用商人早崎専五郎が就いた。だが旧藩債や累積した不良債権の処理に苦しみ明治 9 年（1876）6 月には終焉を迎えた。（滋賀大学経済経営研究所蔵）

株式会社百卅三銀行株式会社近江貯蓄銀行新築落成記念

明治 11 年（1878）9 月、士族の金禄公債証書の質入や売買約定が緩和されてその資本化の道が開かれたのを機に、彦根では明治 12 年 4 月大津の第六十四国立銀行から分離独立する形で第百卅三国立銀行が設立された。有力出資者には彦根藩主等有力士族のほか多くの豪商が参加し、彦根製糸場ほか勃興する近代製糸会社や各種地場産業に資金供給を行った。明治 16 年には国立銀行条例が改正され、開業免許取得から 20 年の期限を以て私立銀行に転換することとなり、同行は明治 32 年（1899）に私立銀行・株式会社百卅三銀行として生まれ変わった。また明治 28 年（1895）には同行の貯蓄部的な存在として近江貯蓄銀行が彦根に開設された。展示した資料は大正 14 年（1925）11 月に河原町に新築された同行本店の落成記念に配られた「絵はがき」と「営業案内」である。（丁子屋薬局蔵）

吉田初三郎筆『近江鉄道湖東御案内』（大正 4 年）

近江鉄道が多賀軽便鉄道から引き継いだ高宮－多賀間を開業した時に発行したもの。もと彦根藩士や近江商人が資金を調達して開通させ「辛苦是経営」と言わしめた。（個人蔵）

彦根高等商業学校の誕生

彦根高等商業学校研究部図書保管簿（大正 12 年）

開校とともに研究部（のちの経済経営研究所）が設置され、生徒と教官の研究のための資料収集も開始された。図書保管簿に記載がある一番はじめに収集された資料は、横浜正金銀行『内外経済界ノ情勢』（大正拾四年下半季）であった。『日本の新富豪』、『日本国民ノ急務』、『大正十五年経済日誌』（安田保善社調査部）と続く。のちの『彦根論叢』へと引き継がれる紀要『パンフレット』第 2 号（大正 15 年 12 月）には「士魂商才と民法」の論文が掲載されている。（滋賀大学経済経営研究所蔵）